

## Stadtteilentwicklungsgeschichte von Kujo und ihre Umgebung

### 九条とその周辺の都市形成史

北村昌史

私の報告は、九条とその周辺、つまり西九条、川口、そして松島の地域の発展を概観することを目標としています。その際、私は時期的な重点を明治期に置きます。我々の研究プロジェクトは、九条の町起こしに関心をもち、そして本日のシンポジウムの報告のいくつかはそれに言及するでしょう。それゆえ、聞く人に九条プロジェクトの歴史的背景を理解してもらうのが私の報告の第 1 の課題です。さらに、私は、西の端の地域の歴史を通して大阪全体の歴史を理解する拠り所を提供しようと思います。

江戸時代にはこの地域は大坂の都市領域の外にありました。つまり、松島の一部をのぞけば、大坂の 3 つの行政単位に属していなかったのです。江戸時代のこの地域の歴史によって最も重要な要因は安治川という運河の開設です。1683 年に河村瑞賢が九条島を切り開いて新たな運河を作りました。九条島は、河口に位置し、そして川のスムーズな流れを妨げていたのです。結果として、島は左岸の九条と右岸の西九条に分かれました。江戸時代を通じてここには新田が開発されます。

1868 年の明治維新以降この地域は変化します。この地域はようやく世紀転換期になって行政的に完全に大阪の都市領域に入りました。江戸時代の 3 つの行政単位は、明治維新の翌年 4 つの新たな管区に再組織されました。それに対して、大阪という統一的な行政上の都市は、いくぶん遅く、1889 年に成立しました。川口と松島がすでに明治時代の初期に新たな管区に属していたのに対して、川口と松島はようやく 1897 年になって大阪に併合されました。

それにもかかわらず、明治維新以後の大阪の変化がこの地域に積極的な影響をもちました。とくに 1868 年の開港がこの地域の最大の影響を与えました。川口地区には関税と外国人居留地が誕生しました。

川口地区の 29 の建築用地に、イギリス人が 15 軒、フランス人が 2 軒、プロイセン人が 5 軒、アメリカ人が 6 軒、そしてオランダ人が 3 軒の家をたてました。これによって、ここにはヨーロッパ風の家並みが出現しました。住民は協会を組織し、そして彼ら自身がこの協会により居留地を運営しました。川口居留地は 1899 年に、日本と欧米諸国との不平等条約の撤廃によりその外国人居留

地としての機能を失いました。

川口地区が河口から遠かったために、大きな船が入港するのは困難でした。それで、商船は神戸港のほうに好んで入港するようになりました。多くの商人がその住居を川口から神戸の居留地に移しました。そのかわりここにはキリスト教の宣教師が住みました。彼は日本人に伝道したのみならず、学校と病院を設立しました。

外国人居留地の廃止後はここには多くの中国人が住みましたが、彼らは大部分日中戦争の開始後はその故郷に戻って行きました。第 2 次世界大戦末期の空襲はここにも大きな被害をもたらしました。今は外国人居留地や中国人街の痕跡はほとんどありません。

松島遊郭は、1869 年に川口居留地の住民と大阪港に入港した水夫と水兵のために誕生しました。港と居留地の失敗のため松島遊郭は、外国人のためではなく日本人のための歓楽街へと発展しました。1903 年の港の再整備をきっかけに、市当局が港と九条の間に大阪初の路面電車を敷設しました。停留所の一つが松島の近くにおかれまして。そのため松島の全盛期は第 2 次世界大戦まで続きました。空襲はここでも破滅的な損害をもたらしました。今、遊郭の場所は公園となっています。

港と河川への近さのため九条と西九条は工業地帯に発展しました。両地域は江戸時代以来九条村と西九条村に分かれ、そして明治維新後も別の区に属しました。しかし、その工業地帯への発展は共通の経過をたどりまして。その背景は、渡し船による両地域の往来でしょう。往来をさらに円滑にするために安治川トンネルが作られました。

九条と西九条の分析の手がかりとして、ここでは一人の鉄工場所所有者、西山卯之助(1875-1954)の経歴を分析します。彼は 1888 年にその地域の他の工場よりも大きい「大阪鉄工場」の職人となりました。その時、彼は 12 歳でした。五年後、彼は遍歴職人として様々な工場で働きました。彼は、1900 年に結婚し、そして同時に自分の工場、「西山鉄工場」を設立しました。彼は、工場を拡大し、そして何度か移転しました。最後の、大阪南東部の藤井寺への移転をのぞいて、彼はその立地を西九条とその周辺に限定しました。その背景は、西九条と九条の工場間の、様々な段階の密接なつながりにあると考えます。卯之助の経歴からは九条と西九条地区の中小規模の鉄・機械工場が、大きな工場の影響のもと独自のネットワークを形成したと結論付けることができます。

この点を『大阪府下会社組合工場一覧』（1907年）をもとに確認したいと思います。造船・製鉄・機械工場が72工場で圧倒的に最大の部門です。その次に大きいのは、9工場の度量衡工場とマッチ工場です。『一覧』に記されている設立年の分析によると、明治20年代の後半から30年代の後半、つまり1893年から1903年間で設立数が最高です。この時期は、卯之助が遍歴職人として技能を磨き、そして自分の工場を設立した時期と重なります。西九条のような、安治川の北岸には多くの中規模な工場があり、そしてその工場は、蒸気機関などの重要な製品を製造していました。それに対して、九条のような南岸では小工場の割合が大きく、そしてその製品は重要でないものにとどまります。

九条と西九条の鉄工場は、質の点でも量の点でも当時の大阪で傑出した存在でした。第2次世界大戦前の大阪は「アジアのマンチェスター」と呼ばれました。九条と西九条の鉄工場は大阪の経済的基盤を支えたのです。

この経済的成長をもとに、九条と西九条の社会も飛躍的に発展しました。九条では新しい道路、九条新道の開通が九条と松島の連絡を改善しました。この道路は、この地域と市中心部の交通にも好都合でした。社会の発展に最も大きな影響は、路面電車の開通でした。1897年に九条と西九条は大阪市に併合されます。1901年以降九条と西九条の人口は統計的に把握できるようになります。1901年から1911年にかけて九条と西九条の人口は倍増しました。両地区は、「住工混在地区」となりました。

ここでも空襲が大きな被害をもたらしました。戦後は九条と西九条はその経済的活力を失いました。

## Über die Hundertwasser-Architekturen in der Stadt Osaka

—deren gegenwärtige Lage und Aufgaben—

大阪市におけるフンデルトヴァッサー建築について—その現状と課題—

高梨友宏

### 0. はじめに

HW はデザイナー、画家として、またエコロジーに基づく建築理念を持った建築家としても知られる芸術家である。大阪市には詩が委嘱した彼の建築物が 3 つある。舞洲のゴミ焼却工場とスラッジセンター、そしてキッズプラザ大阪である。その中でもゴミ焼却工場とスラッジセンターは大規模な公共施設であり、これらの建設のためには同様の施設の通常の建設費を大きく上回る費用がかけられた。

大阪市の財政はこれらの施設が作られた後に様々な原因から悪化し、市民からこのバブル経済期に発注された建物のために、大阪市に対して批判が向けられることも少なくない。HW は大阪市に寄せたメッセージの中で「人々がこの建物を持つことを誇りに思い、親しい友のように思う」ことを望んでいる。じっさいそう思う人も少なくないが、その近くにある遊興施設（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）や市の中心に買い物に出かける人の数に比べると、ごくわずかしかない。

本発表ではまず、HW の建築物の特色と理念を明らかにし、次に HW に建物の外装デザインを依頼した行政側の意図と建設の経緯を紹介し、さらに、その現状と観光資源としての活用における問題点について述べ、最後に活用に向けてのいくつかの提言をしたいと思う。

### 1. HW 建築の理念と特色

近代の建築の美は、しばしば機能美にその本質があると言われる。建築物が美しくあるためには、それがもつ目的と、この目的を実現する機能が目に見える形式に美しく昇華していなければならない。機能性は効率を追求する。そのため、無駄のない単純さが善しとされる。カントは彼の美学思想の中で、建築の美について、自然の本来的な美が一般に目的を先行させないのに対して、目的の概念が作品に先行し、合目的的な形式が感性的な形式をとる特殊な種類の美であると論じた。この場合の目的とは有用性であり、有用性は機能性によって判定されるから、建築の美とは、その建物の機能と一体になった形式が感覚に快く訴えかける美であるということになる。そして建築に関する近代の思想は概ねこの方向をとっている。

しかし HW の建築はその建物の本来の目的とは直接には関係のない美的概観を身にまとう。しかもその概観は種々の色に溢れ、非対称的であり、各部分が有機的な関係を保つ、

きわめて個性的な造形である。事実 HW は、公的に表明された発言の中で、合理化や効率化を嫌い、その象徴ともいえる「直線」や「一様な平坦さ」を批判し、自然に学ぶ必要があると述べている。曰く、「自然の中には直線はない」。「直線は人間性を崩壊させる悪魔の道具である」。「平坦にされた下地に一様に塗られた色は味気なく生気に欠ける。自然のなかでは様々な色が豊かな変化と多様性を持って互いに対比し合い、生き生きしている」等々。つまり彼の建築の概観は、建築物本来の目的や機能とは異なる機能を負わされている。人間にとって、親しみ深くぬくもりのある造形によって、近代合理主義によって人がそこから切り離されてしまった自然とのつながりを思い起こさせるという機能である。

自然を尊重する彼の思いは、さらに、当然のことながら、エコロジー的方向に向けられる。自然を破壊することは人間性の崩壊を招く。ゴミをなくし、自分の出したゴミを自らの責任で引き受ける人間でなければ、生き残ることが出来ないと彼は言う。自然の創造性に学び、自然を保全し、自然と調和することは、HW に言わせれば、人間の道德問題である。「自然、創造、芸術は一体なのだ」。

したがって、彼の建築理念は、

- 1) 近代合理主義建築の修正を目指す。
- 2) 地域の文化や歴史に根ざしたものではなく、人間にとってもっと根源的な自然との調和の回復を目指す。
- 3) エコロジーに配慮する。

以上の3点に集約できる。

## 2. ゴミ処理場建設に関する大阪市の意図と経緯

1988年にHWはヴィーン市長からの委嘱により、ヴィーン郊外のシュピッテラウのゴミ処理施設の改装を請け負った。この施設が世界中で評判を呼んだ。一方、大阪市には当時、オリンピック誘致の計画があり、誘致が実現できた場合には、人工の埋め立て島である舞洲がメイン会場になる予定だった。結局、この誘致はその後失敗に終わることとなるが、大阪市は、本土と橋でつながる舞洲の入り口付近に、HWにデザインを委嘱してゴミ処理工場とスラッジセンターを向かい合うようにして建てることを議会で決定し、オリンピック誘致が頓挫した後にも建設が進められた。これらの建物それぞれが持つ二つの巨大な煙突は、島の入り口の門のように建っているのである。オリンピックの誘致が成功していれば、この「門」は、世界中からの客人を迎え入れ、「エコロジーと芸術に配慮する日本第二の経済都市・大阪」をアピールするはずだった。

当時大阪市は予算も潤沢であったため、巨額の資金を投入して二つの施設を建設することについて、議会ではとくに大きな反対もなかったと環境局の担当者は言う。それでも、HWが提出したゴミ処理工場の煙突のデザインは、それを実現しようとするれば、通常の建設費の1.5倍のコストがかかることが判明し、大阪市とHWの間で厳しい交渉が行われた。

HW 側は結局妥協して、現在の煙突の形に計画を変更せざるを得なかった。HW の当初の意図は、人が上ることが出来る設備を煙突に付加することにあった。あの煙突に上ることができれば、大阪湾だけではなく、大阪部屋が一望できる、素晴らしい眺望をひとは手に入れることが出来たはずだったのだが。

### 3. 問題の分析

単調でザッハリヒな近代的合理主義の建築を批判して、人と自然を結びつける有機的な形態を持つ建築の実現を目指す HW の意図からすれば、舞洲のゴミ処理工場やスラッジセンターには多くの人が訪れ、憩いの場として多くの市民から愛されてもよさそうなものである。しかし実際にはそれほど多くの訪問者はいない。事前に申し込めば内部見学が可能で、案内人が工場の中を 1 時間半かけて案内してくれるが、この見学会への訪問者数は年間 1 万人程度であり、しかもその半数以上が、社会見学のために連れてこられる小学生である。

大阪における HW の魅力的な建物への一般市民の関心が低いのはなぜだろうか。

その理由として考えられるのは、

1. アクセスの悪さ（舞洲に行くには自動車か路線バスを利用しなければならない）。
2. 市の縦割り行政が島全体の総合的開発の壁になっている。舞洲はスポーツ・アイランドとしての側面以外に、多くの運送・食品会社が倉庫を造っており、島の性格が一貫していない。
3. ゴミ処理場に限って言えば、建設費を抑えたために、人が上ることが出来ない煙突が付設されることになり、工場の魅力が大幅に落ちた。
4. 経済的な不況が後押しするマスコミなどの批判的な論調が、HW 建築に対する悪いイメージを作った。

### 4. 結論：課題の提示

報告者は神戸に住み、大阪市立大学に通っているが、自動車を使って出勤する場合は、大阪湾に沿った高速道路を利用している。そこから海越しに舞洲の HW 建築を眺めることが出来る。そして大阪に HW の公共建築の傑作が 2 つ（キッズプラザを含めて 3 つ）もあることに、今は誇りを覚える一人である。そう思うようになったのにはあるきっかけがあった。2011 年 3 月にドイツ出張に行った際、知人とともに訪れた Abensberg で、偶然、HW-Turm(フンデルトヴァッサーの塔)に出会ったのだ。ビール工場とそれに隣接するビア・ガーデンを HW がデザインしたもので、ビア・ガーデンの中央にその塔がある。それは彼の遺作の一つであるが、多くの人々—老人も大人も子供も—がその塔の周りでくつろいだり、塔に上って遊んでいた。実に居心地のよい空間だった。それを見た時、HW の作品

が人々を呼び寄せ、彼らを互いに結びつける力を持つことを発見した。それ以後、舞洲の HW 建築に関心を覚えるようになり、個人的にしばしば訪れている。しかし残念なことに、いつも周囲に人の姿がなく、閑散としているのである。

あの建物がもっと人々に愛されるようになるためにはどうすればよいのだろうか。既に買ってしまったものについて、あとから税金の無駄遣いだと批判しても仕方がない。マスコミの批判的な論調も最近では下火になっていると市の担当者は言った。しかし、それでも人の行動がマスコミによって容易に左右されるなら、大阪市は HW 建築についての肯定的な論調を引き出すよう、なお努力する必要があるだろう。また、HW 建築だけでなく、舞洲全体の管理運営や総合的開発についても、大阪市の縦割り行政を排するための NPO 法人など民間の力も活用すべきだろう。知名度や評判が好転すれば、人の流れも変わるだろう。そうすればバスの便数も増えて、アクセスの悪さも改善されるだろう。

## “Stadtteil mit Gemütlichkeit” für Jungen: Wohnen, Arbeiten und Vergnügen

(若者にとっての住応えのある町—住む、働く、楽しむ—)

木戸 沙織

### 1. 住むこと (阿倍野)

築 70 年の阿倍野の木造建築の改修 (焼杉塀、もの干し場などを増築し、玄関、窓などを新しくする) し、若者や家族、店舗向けに賃貸する事例の紹介。伝統的な日本建築の技術と現代風の生活を調和させることに改修の眼目がある。間借り人は、自分の家のような愛着を持つという。玄関口の格子戸などにデザインの多様性を持たせ、趣味的な側面がある。楽しんで住むことを意識した生活がそこで営まれる。

### 2. 働くこと (船場)

第一次大戦前に立てられた、船場の歴史的な近代建築を改装して、集会場、店舗、オフィス、レストランなどとして再利用される事例を紹介。これらのケースは、オーナーも客も若者が多い。また、建物の外観は旅行者を引きつける魅力を持つ。

### 3. 楽しむこと (堀江)

堀江は第二次大戦前までは、水運に基づく材木の町、家具の町として栄えたが、戦後は人々の生活様式が変化して、水運が廃れ、街としても衰退した。しかし 2000 年頃には、店舗の所有者の世代交代が相次ぎ、若者を対象とするおしゃれな喫茶店や小物の街として生まれ変わった。若者を呼び込むイベントが開催されるなど、堀江は新たに活気を取り戻した。一方、周辺の公園なども整備され、住宅街としても人気の高い街になっている。

## 結論

上記の事例地区では、古い建物が改装されたり再利用されることで、街のポテンシャルが再生されている。その場合、住民がイニシアチブをとり、街としてのまとまり、住民同士のつながりが生み出されている点が注目される。